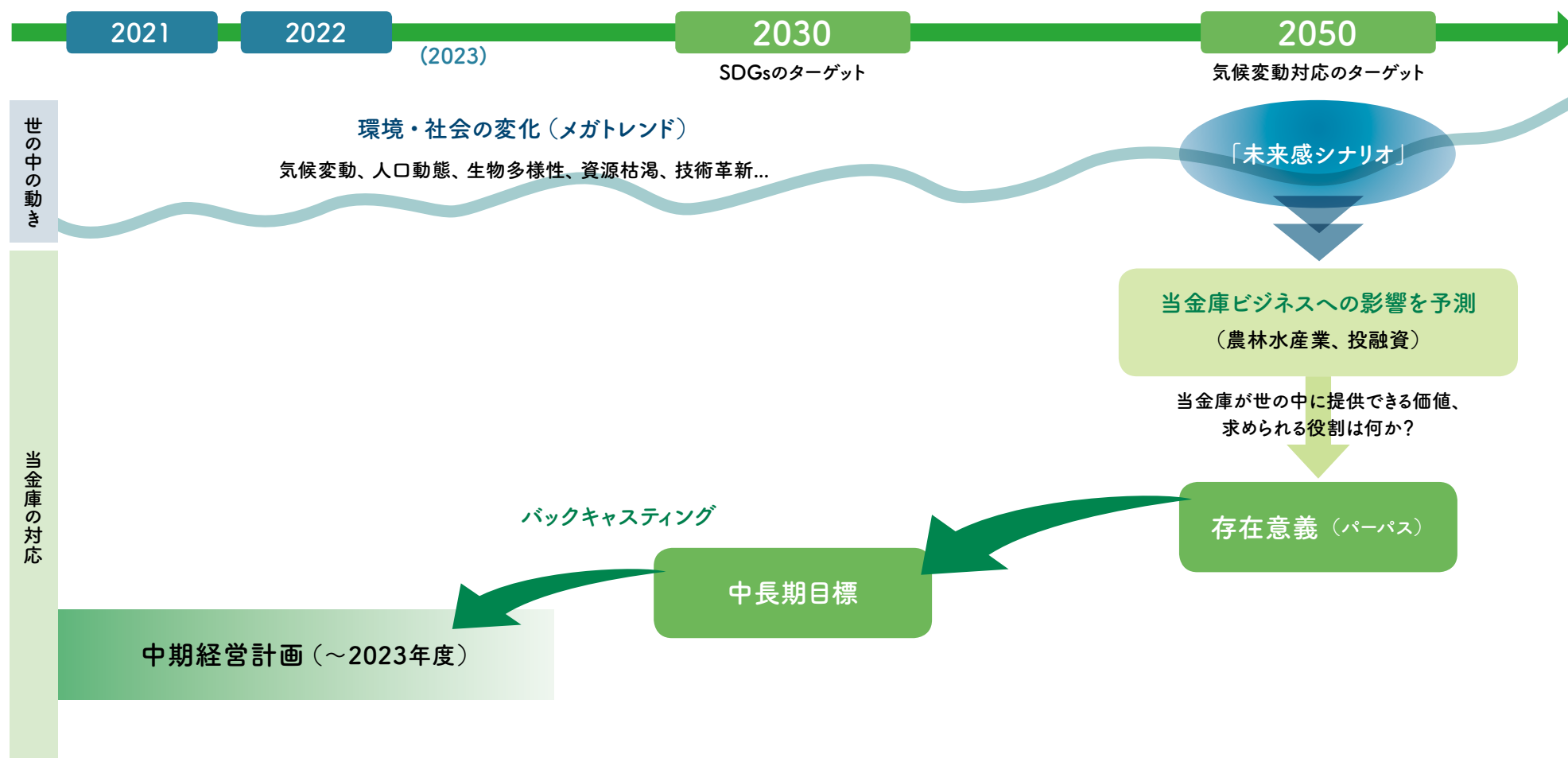


## 存在意義・中長期目標の策定

サステナビリティが一層重視され、パリ協定等気候変動対応は2050年、SDGsは2030年をターゲットに世界中で議論が進み、対策が行われています。

私たちは従来のような3年～5年の経営計画を立てるだけでなく、中長期的な視点に立って農林中央金庫のあるべき姿・世の中に提供できる価値や役割を再定義し、その実現に向けた具体的な目標を置いて実践していくことの重要性を認識しました。

これを踏まえ、当金庫が2050年に向けて社会に提供しうる価値＝「存在意義(パーパス)」、存在意義を踏まえ2030年に達成すべきゴール＝「中長期目標」を定めました。



「存在意義」・「中長期目標」の策定にあたっては、2020年に、理事長以下全役員出席によるワークショップを月1回のペースで開催しました。2050年の地球環境や社会の変化（メガトレンド）を予測したうえで、バックキャストिंगの思考に立ち、以下のプロセスで議論を行いました。議論の内容は、経営管理委員、当金庫の職員に共有し、意見交換やアンケートを通じて成案化に反映しました。

### 議論のプロセス

- ① 環境・社会の中長期的変化（メガトレンド）を踏まえた、2050年の「未来感シナリオ」を共有
- ② 「未来感シナリオ」が農林中央金庫の基盤やビジネス（農林水産業、投融資）に与える影響を予測
- ③ ②に対し、当金庫が世の中に提供できる価値、求められる役割は何か＝「存在意義」を議論
- ④ 「存在意義」を踏まえ、2030年に達成すべきゴール＝「中長期目標」を議論
- ⑤ 経営計画に反映（「農林中央金庫の目指す姿」の再整理 → P8）



役員ワークショップでのグループディスカッションの様子

### 2050年に向け留意すべきメガトレンド

	想定される影響（例）
1 気候変動	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 農産物品質低下、栽培適地変化</li> <li>■ 水産資源の生態地域変化、漁獲量減少</li> <li>■ 自然災害、海面上昇</li> </ul>
2 生物多様性・生態系喪失	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 農林水産業の強靱性喪失（適地変化）</li> <li>■ 森林機能喪失</li> <li>■ マイクロプラスチックの生態系への影響</li> </ul>
3 人口動態	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 途上国の人口増によるGHG排出量増加</li> <li>■ 国内の人口減による過疎化、担い手不足</li> <li>■ 国内の企業・人材流失、産業空洞化</li> </ul>
4 資源枯渇（食料・水）	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 世界の人口増による食料・水資源争奪戦</li> <li>■ 国内の食料安全保障</li> <li>■ 化石燃料の絶対的減少</li> </ul>
5 技術革新	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ スマート農業による労働力不足解消</li> <li>■ 農業由来のGHG排出削減</li> <li>■ 再エネ、ブルーカーボン、森林資源活用</li> </ul>

打ち手

### 農林中央金庫としての優先課題

A 気候変動リスクの低減・脱炭素社会実現に向けた貢献

B 農林水産業の生産基盤維持、安心・安全な食料確保実現に向けたサステナブルな農林水産業およびバリューチェーンへの貢献

C 少子高齢化・過疎化が進展する中での地域コミュニティの維持に向けた貢献